（第６回日本土木史研究発表会論文集　1986年６月）

福岡市の土木史的考察（その１）

－古代から秀吉の博多再興（町割り）まで－

高田機工（株）　正会員　秀島　隆史

概　要

およそ、都市の発生とその発展は、その都市の位置的立地条件と自然的環境条件に基くものを基盤としている。しかしながら、各都市の持つ性格やその独特の形態に関しては、人為的な施策の経緯が深く関与していることも事実である。

福岡市は九州北部にあって、昭和47年に政令都市に指定された人口 120万を超える西日本第一の都市であるが、この福岡市の中心市街地区の都市形態は甚だ特異なものであり、全国的に見ても極めて珍しいタイプの様相を示していると思われるものである。それは、町人町として独特の発展過程を辿った「博多」と、城下町として形成された「福岡」とがドッキングする形の、所謂「双子町」的な形態によるものである。

福岡市の発生の歴史は極めて古いが、その繁栄の発端は平清盛による「袖の湊」の築造であり、次のエポックは豊臣秀吉の「博多再興（町割り）」であり、次は筑前・黒田藩の初代藩主・長政の「福岡城下町」の建設であった。いずれも名だたる武将であり、かつ土木的技術集団とその組織を駆使し得た人物の事跡である。

本論は、この福岡市の発生とその発展過程について、主として土木的視点から考察を試みたものであるが、城下町建設以後については（その２）で述べたい。〔都市・建設・変遷〕

1.　はじめに

（1）福岡市の都市としての諸条件

都市の成立には、その位置的立地条件と自然的環境条件が基盤として存在すると思われるが、福岡市の場合は、日本西端の九州北部に位置していて、大陸（特に朝鮮）とは極めて至近距離にあり、古来大陸との交流におけるわが国の玄関口としての位置にあった。また一面においては、外敵侵入もうけ易く国防上極めて重要な地区でもあった。福岡市の北部の博多湾は玄海灘に面してはいるが、海の中道（半島）と糸島半島という自然の防波堤に囲まれた比較的波静かな湾であり、水際線そのものはやゝ遠浅の状況ではあるが、港の条件としては良好と言えるであろう。また、福岡平野は那珂川，御笠川という二つの中小河川が貫流していてその沖積作用によって成立したと言えるが、その水運の便と共に都市の所謂・ヒンターランドとして、大きな人口の収容，経済基盤の充実に十分堪えうるものであった。

また人為的な施策としては、先に述べたように福岡はわが国として重要な位置にあるが、中央政府からは極めて遠隔の地に在るために、中央政権の出先機関若しくはそれに代るべき拠点を設ける必要があった。そして、かゝる思想の下での特権の付与或は保護政策、産業や貿易の奨励政策等にたすけられつゝ都市発展の経過を辿るわけであるが、中央権力の衰退に伴っては、重要地区なるが故に地方豪族の争奪の巷となる命運も担った。しかしながら、基本的には博多商人と言われる庶民の旺盛な活力（バイタリティ）が、幾多の苦難の歴史を乗り超えて、今日の福岡市の存在と発展の基礎を担ったと考えられるのである。

（2）福岡と博多の関係

近代的都市の様相をもつ現在の福岡市においても、その中心的市街地は、中央区と博多区と言うことが出来る。江戸時代にあっては、市内中央を流れる那珂川を境界として、西を福岡（現・中央区）東を博多（現・博多区）と言い、共に正式名称として存在したのである。この両地区はそれぞれ発展の歴史を異にしていて、福

岡は城下町、博多は町人町としての性格を有する。したがって、色々な面において対照的な点が多く、過去においては対立的感情のあったことも否定できない。

つまり、「福岡」は黒田藩士・母里太兵衛友信の逸話〔福島正則の所望により、一升五合の酒を大盃にて次々と飲みほし、約束であるとして家宝の名槍“日本号”を貰って帰ったと言う。〕に基づく黒田節（酒は飲め飲め）に代表されるように、勇ましくて武骨的な気風であり、方言も所謂「ガッシャイ言葉」といって何となく武家的である。それに対して「博多」は、博多節（博多に来る時ぎゃ一人で来たが、帰りゃ人形と二人連れ）に代表されるように何となくあでやかで情緒的であり、方言も所謂「シンシャイ言葉」といって、極めて庶民的であり、産物も博多人形，博多織などがあり、お祭も山笠，ドンタク，博多にわかなどと勇壮な心意気と明るくユーモラスな庶民性を示すものが多い。

要するに福岡市は、性格の相異なった「福岡」と「博多」が並存するところの、所謂「双子町」的な都市であると言うことができよう。

2. 古代の福岡周辺

縄文時代における福岡周辺の地形については推測する以外にないが、所謂・福岡平野は先の二河川による沖積作用の進行途中であり、陸化は充分になされずに海岸線は内陸部に深く湾入していたものと思われる。しかしながら、現在の福岡平野を取り囲む丘陵地帯の裾の周辺には、多くの縄文遺跡が発見されていることから見て、この周辺地区には当時かなりの人々が住んでいたものと想像されている。

福岡市東区板付（福岡空港の西）にて発見された板付遺跡は弥生時代初期の水稲農耕跡を示すもので、わが国における稲作農耕の始まりを示すものとして注目されている。また、そのやゝ北の比恵遺跡は弥生中期の環溝住居遺跡であり、この付近は弥生時代には逐次陸化もすゝみ、大陸と近い関係もあって、わが国の稲作農耕のさきがけというべき地域であった。

このように、現在の福岡市およびその周辺は、極めて重要な外来文化の吸収口・揚陸地とも言えるものであって、「日本文化の発祥地」らしく、およそ 600年にわたる弥生時代の重要な遺跡・遺物がきわめて多く出土している地域である。

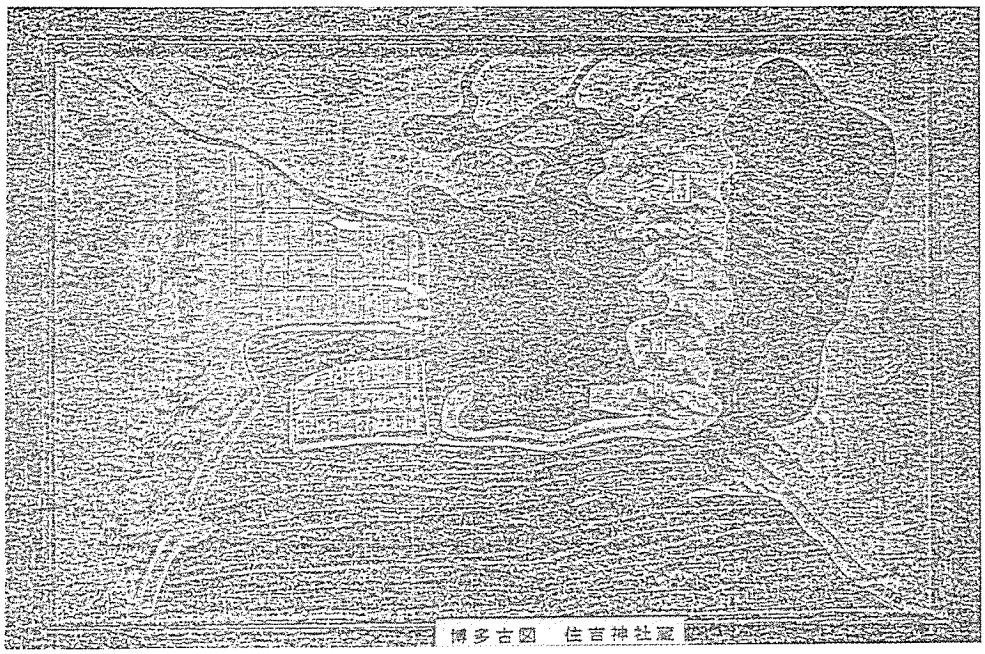
また、1784（天明４）年に博多湾口の志賀島から出土した金印の「漢委奴国王」の金石文は、古代の外交上の具体的なわが国名が「奴国」としてこの付近に存在していたことを示している。

時代は下るが、日本書紀の宣化天皇元年（ 536）の条に、大宰府の前身とも言うべき〔筑紫〕官家（みやけ）を那の津のほとりに設けたことが見えるが、そこは福岡市南区大字三宅附近であろうと言われている。三宅（屯倉に通ずる？）の隣接地には現在、日佐（おさ），老司（ろうじ）があり、こゝは通訳の居たところ、狼米を司る役人の居たところとも言われているが、いづれにしても那珂川の下流部の地点にあって、福岡平野の生成過程から推測して当時舟の就航は可能であったと考えられ、諸国の米穀の集散の便は十分あったであろうと思われる。

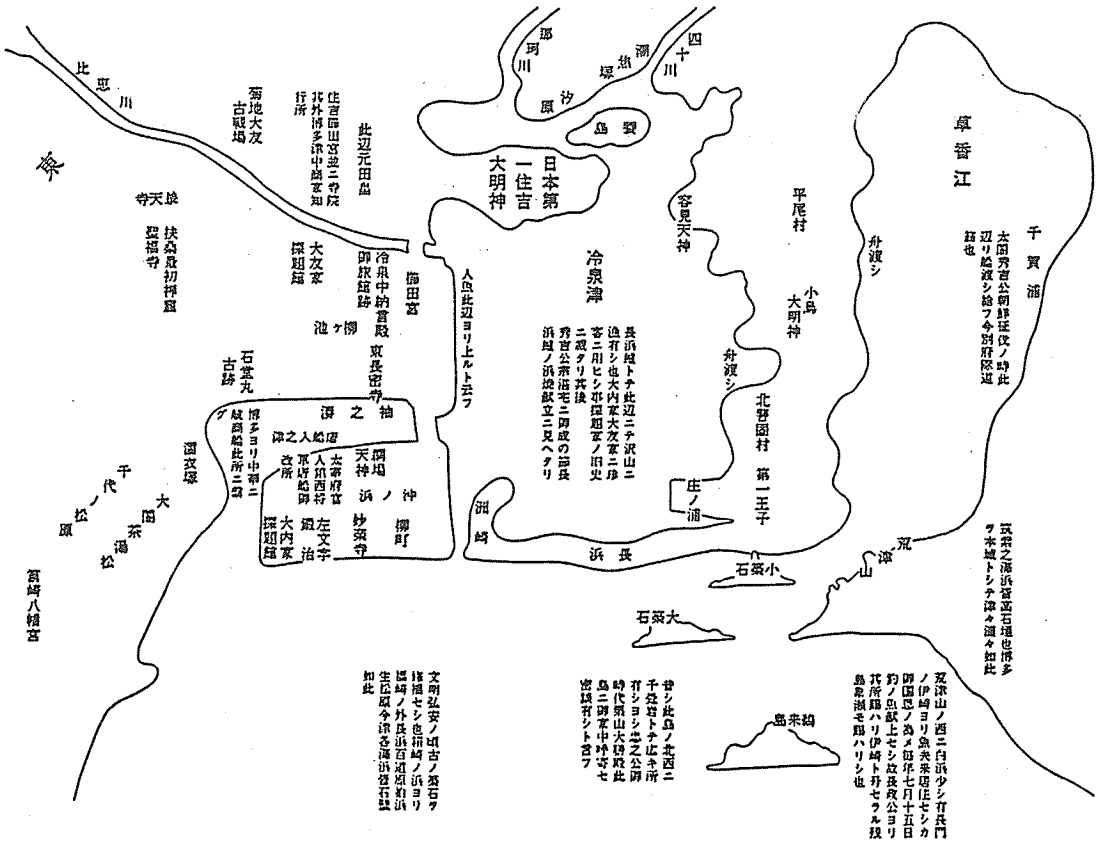
このことは、この地が都から遠く離れ、外敵に対する国防上の重要な地であると共に外交上においても枢要なところであったことを示している。

663（天智２）年、わが国は百済救援のため出兵し、唐・新羅連合軍と白村江に戦うが大敗する。これを機に、国の出先機関はその防衛上福岡平野奥の太宰府・都府楼に移った。しかし、太宰府は奥地過ぎる為に、海岸部に更にその出先機関を設ける必要を生じ筑紫館（後の鴻臚館（こうろかん））を設けたが、その場所は現在の福岡城内の平和台付近であったと言われる。その後はこの筑紫館が外交上の拠点となり、荒津泊を門戸として遣唐使の出発や異国の使節の接待、貿易等の展開がなされたのである。したがって、清盛の大宰大弐当時はこの地方は筑紫館，荒津附近が中心であり、博多の地は集落も少い農漁民の地区であったと想像される。

清盛が荒津泊の存在を知りながら、新しく博多の地に築港を計画したのは、既往の官貿易に対する反骨的精神と言うよりも、むしろ福岡平野というその大きなヒンターランドの存在を意識した為であろうと思われるのである。


博多古図　住吉神社蔵

古図説明（住吉神社）


卓香江
千賀浦
太閤秀吉公朝鮮征伐ノ時此辺リ船渡シ給フ今別府際道路也
舟渡シ
平尾村
小島
大明神
容見天神
北管固村
第一王子
庄ノ浦
長浜
石築小
石築大
冷泉津
長浜組トナ此辺ニテ沢山ニ魚有シ也大内家大友家ニ降客ニ用ヒシ邪提組家ノ旧史ニ渡タリ其後秀吉公筑紫ニ御成の節長浜ノ浜地獄文ニ見ヘタリ
人魚此辺ヨリ上ルト云フ
日本第一住吉大明神
四十川
潮堀
汐原
島賀
那珂川
比恵川
菊地大友古戦場
住吉山宮並ニ寺院其外博多津中商家知行所
此辺元田島
天満宮
扶桑最初禅寺
冷泉中納言殿
梅田宮
御旅館跡
大友家
探題館
柳ヶ池
東長寺
石堂丸古跡
抽之浦
博多ヨリ中第ニ城郭此所ニ有ク
唐人船西村
太宰府官人
唐人船御
唐之津
唐人之宿
左文字鍛冶
大内家探題館
岡崎ノ浜
天神
沖ノ柳町
妙楽寺
岡崎
櫛田宮
千代ノ松原
大国
東湯松
筑紫八幡宮
筑紫之浦浜皆悉石垣也博多ヲ本城トシテ津々浦々如此
荒津山ノ西ニ白浜少シ有民門ノ伊崎ヨリ魚来居住セシカ御国恩ノ為メ毎年七月十五日釣ノ魚献上セシ故長政公ヨリ其所賜ハリ伊崎ト升セラル我島瀬モ賜ハリシ也
荒津山
島来崎
昔シ此島ノ北西ニ千畳岩トチ広キ所有シヨシ也之公御時代第山大明殿此島ニ御家中神守セ密城有シト宮フ
文明弘安ノ頃古ノ築石タ様組セシ也櫛崎ノ浜ヨリ櫛崎ノ外長浜百道原和浜生松原今津各海浜皆石垣如此

3. 平清盛の袖の湊の築造

（1）袖の湊の存在について

福岡市の住吉神社に絵馬が蔵されている。この絵馬並びにそれに基づく「博多古図」は前頁に掲げるものであるが、これは鎌倉時代に描かれたもので、後に江戸時代に筆写されたものであろうと言われている。

この絵馬の中央付近には、矩形状の沖の浜があり、その奥に袖の湊がある。この袖の湊は、一名「幻の港」とも言われ、現在は市街地の地下に埋没していて、その確認は困難である。しかし、この袖の湊の存在と、それが平清盛による築造であろうと論ぜられたのは、中山平次郎氏（1871～1956・元九大医学部教授）である。中山平次郎氏は、考古学についても造詣が深く、九州における考古学の開拓者的人物であるが、その著「古代の博多」いおいて袖の湊につき論ぜられている。その論旨とするところを要約すると、①筑前国続風土記，石城志などの歌群の中で、「博多」を歌詞とするものと「袖の湊」を歌詞とするものを分類すれば、後者はすべて清盛の大宰大弐となった1158（保元３）年以降であること。②沖の浜の跡と推測される行の町、市小路からの出土白磁（平安末期のもの），地層の考証の結果、約９尺の人工盛土と判定される層があること。③清盛が後に築造した大輪田泊（神戸港）とその築港方法が極めて酷似していること。である。

（2）当時の時代背景と清盛の意図

中央政府の重要な出先機関である大宰府は、その外交的門戸として筑紫館（後の鴻臚館）を設けたが、その大陸との交易は、唐物交易使の派遣にみられるように官設市場的性格が強かったと言われる。

平安時代も年を経て、武士の台頭にみられるように次第に末期的症状を強くしていくが、大宰府においても中央政府官人の遥任（実際に赴任しない）などもあり、役人の腐敗に伴って官貿易も自壊し始めて次第に私的貿易の気運が高まってゆくことになる。この気運に乗って地元町民の活躍が目立ってゆくが、これが所謂・博多商人の源流とも言うべきものであろう。

また、中央権力の衰退に伴って、所謂・税金のがれの方策として神社，寺院，豪族等に寄進する荘園が増えてゆくが、九州も勿論例外ではない。この風潮に乗って平家一門（平正盛，忠盛，清盛）はその武断的，経済的九州制覇をすすめ、主として有明海沿岸の穀倉地帯を包括する壮大な荘園を支配するに至るのである。そして、清盛はついに公然と官貿易を否定し、対宋貿易の巨利を独占すると共にその拡大と壮大な荘園経営（穀物や諸物資の集積と輸送）の推進のために、この博多の地に「湊」の築造を計画するに至ったと思われる。

この袖の湊は、土木的に見れば必ずしも自然条件としては良好ではなく、後に十分な維持管理が行われなければ早晩埋没の運命となるものではあったが、清盛はそれも承知の上で、短期間における巨利の収奪を目指したものと思われるし、また、いづれ中央近隣の地（大輪田泊？）に本格的築港を行い直接宋船を導入する意図があった為に、その間の暫定措置という意味もあったであろうと推測するものである。

この清盛の袖の湊築造に伴う貿易の振興等は、博多に繁栄をもたらすと共に博多町人の成長をもたらす結果となったものであり、博多の歴史を考える上で清盛のこの土木的事跡の効果を無視することは出来ない。

（3）袖の湊の土木的考察

a）当時の地形と湊の構想

袖の湊の築造は1161（応保元）年頃と言われるが、この頃の附近の地形を推測してみる。

「博多古図」を見ると、先に述べた福岡平野を貫流する那珂川，比恵川は冷泉津に流入している。冷泉津は現在、この河川によって沖積陸化されて福岡市街地の中心部となっているが、当時は浅い潟状で水面下にあったと思われる。そして流入土砂の多くは洲崎より博多湾に流出し、湾流（西から東へ）の作用によって所謂沖の浜並にその前面に洲となって沈着していたであろう。しかし、袖の湊のすぐ南側には現地盤の微高地（一名：富士見坂と言う）が存在していた為に、袖の湊東端は所謂水裏となって渕の様な状態となっていたと思われる。

清盛はこの渕状の一帯を船溜りとして活用し、この微高地前面（北）の土砂を堀削、沖の浜に盛土して湊を作ると共に、沖の浜前面（北）の洲を浚渫して沖の浜に盛土することによって築島（防波堤）となす、所謂堀り込み港湾的な計画を樹てたものであろうと思われる。

b）袖の湊と沖の浜の位置，と形状の推測

貝原益軒の「筑前国続風土記」〔1703（元禄16）年〕の中に、『今博多の入定寺と本岳寺の間より、港橋迄、東西に溝とほれり。今是を大水道と云、是袖湊の残れる也。唐土船の泊りし所なれば、さばかり大なる港なるべきに、古今の変替かくの如し、港橋と云も袖湊の残される溝にかけし故也。』とある。

その後約 300年を経た今日においては現地に大水道の跡も無く、既往の直接的史料に欠けるこの袖の湊に関してはかなりの推測を加えざるを得ない。

先に述べた中山平次郎氏はその著「古代の博多」において、袖の湊，沖の浜の位置，形状について一応の説を樹てられている。大変貴重な説であるが、土木的立場の私としては多少部分的に見解の相違があるので、失礼ながら私の推測によるところを中心に述べることとする。しかし、推測の根拠を提示するスペースを持たないので簡略に結論的なことを示すに止める。

①袖の湊

袖の湊の北岸と南岸は、博多の江戸時代古図〔1812（文化９）年〕に見える大水道を現在地図に投影した結果、石堂橋を通る東西線のやゝ南側が北岸の線である。その西端が港橋の位置であり、後で述べる湊入口の航路までの北岸延長は約 780mである。南岸は西門橋を通る東西線の北側にあるが、それは現在地下鉄が通っている国道 202号の約70m南である。両岸の間隔は約 170mでこれは袖の湊の巾である。南岸の東端部は船溜りの関係上やゝ南にふくらんで、陸部に達していた。その西端部はやゝ北にカーブする形で突出し、湊橋に至ったと推測されるが、その南岸延長は約 950mであったと思われる。

港橋の位置に袖の湊の開口部を設けて西の冷泉津と連絡したことは、小舟の出入の便もさることながら、湊内の水の浄化が主目的であったと思われる。冷泉津には那珂川，比恵川が流入しているが、この開口部からの流入水は当然に土砂の流入を伴うので、この点から見れば湊の持維管理上は好ましくない。したがって上流部を突出させてできるだけ小さい断面に抑えたであろうが、実際の規模は不明である。後年の袖の湊埋没の主要因はやはりここからの流入土砂であったと思われる。

②沖の浜

沖の浜の南岸（袖の湊の北岸）については先に述べたが、東岸は袖の湊の進入航路に面している。その線は竪町筋のやゝ西で延長約 300mであろうと思われる。この東岸と対岸の陸地との間が舟の進入航路であるが、この巾は南部で約 120m，北部で約 200mと推測され、平均しては 150m位であったであろう。西岸については、確信はないが河川状況等により考えて現在の博多川（那珂川派川）の右岸護岸線を考えて大差ないと思っている。延長約 330mである。北岸は恵比須橋東西筋の北に妙楽寺があったが、古図によるとこの北岸に妙楽寺があることから推定して、この町筋より40～50m位北の線であろうと思われる。延長は約 800mである。

この沖の浜は自然の寄洲をベースとして、袖の湊，進入航路並びに前面（海側）の寄洲土砂を堀削し盛り上げて作られた東西約 800m，南北約 300mの矩形状の島であって、袖の湊の防波堤の機能を果すと共に港湾としての荷役施設，倉庫群，貿易の管理・監督機関等はもとよりのこと、その後、住民も増えて寺社等も立地し一つの町を形成したものと思われる。

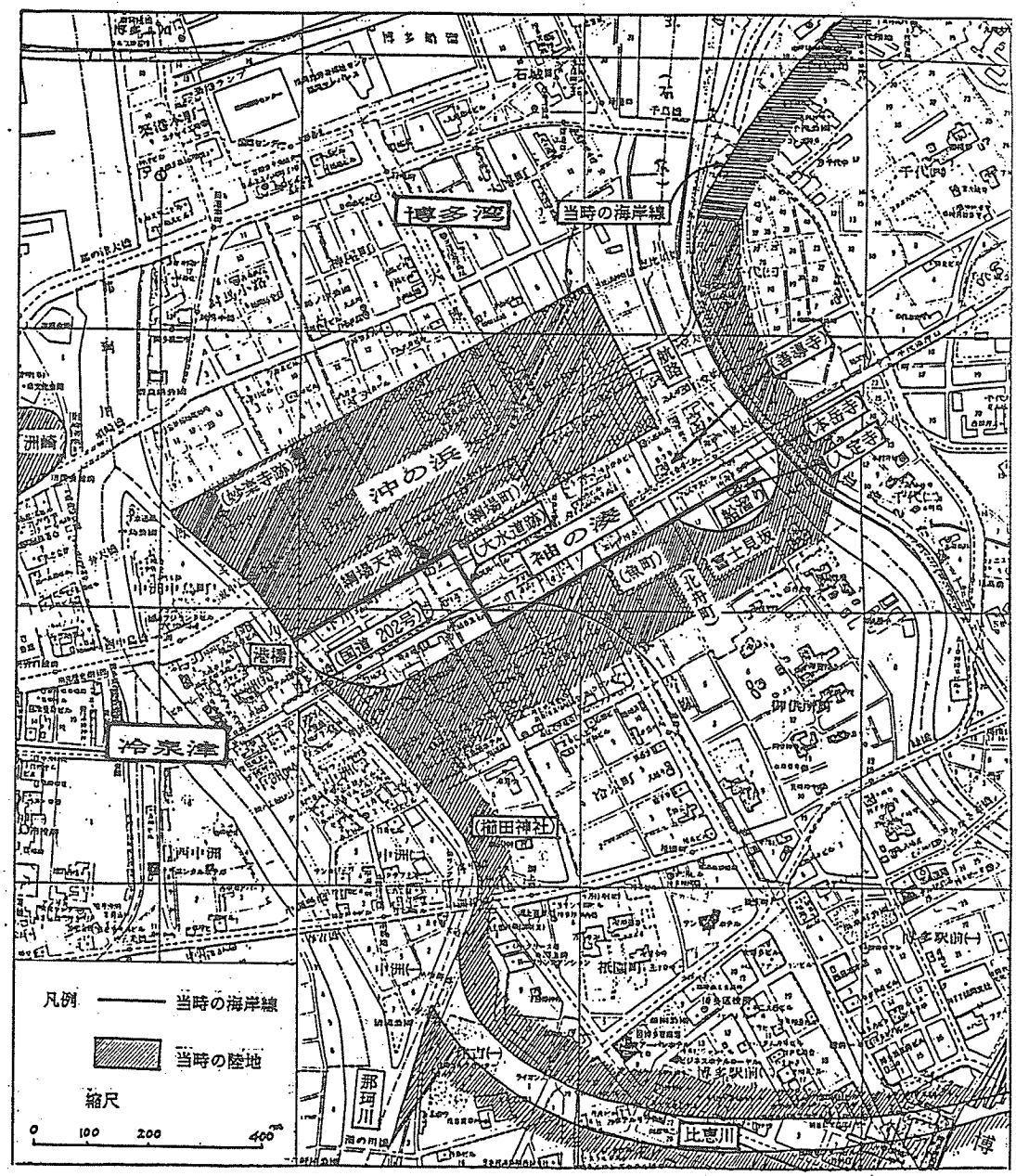
袖の湊，沖の浜の周囲は護岸で固められていたが詳細は不明である。現在上呉服町の一角に「袖の湊の名残り石」と伝えられるものがあるが、雑割石で割合大きく堅い質であり、表面は滑らかなものが多い。石の産地は西の今津附近とも云われているが筆者には判断しかねる。

（4）「袖の湊」のその後について

清盛の対宋貿易の基地として博多は繁栄してゆくが、「驕る平家久しからず」と言われるように平家は袖の湊築造後約20余年の1185（文治元）年に滅亡し去る。その時、平家の被護の厚かった博多在住の宋人達の間には大きな動揺を生じたらしく、引揚げる者が相次ぎ、博多百堂と言われた宋人の堂舎が多くあったところも空地と化したと言われる。しかし、時勢が落ちつくと、対宋貿易の中心地らしく聖福寺や承天寺などの建立が行われるなど次第に賑いを取りもどしていった。しかし、その後大陸では宋が亡び元が興って情勢が変り、元寇

によって博多は打撃をうけることになる。やがて国内も政情不安定な時期を経て、室町幕府による勘合貿易によって再び活気を取りもどすわけであるが、その間博多は対外貿易の基地とはいうものゝ、袖の湊を維持管理する強力な権力者が存在せず、基本的に十分な維持工事を必要とするこの袖の湊は次第にその機能を喪失してゆくことになる。

もともと沖の浜は寄洲であり、前面の洲を一時掻き上げたといっても、次第に前面に洲が発達することは自然の理であり、東側の進入航路も次第に狭く浅くなっていったであろう。また先に述べた如く、袖の湊の西の開口部からの流入土砂は、必然的に湊を西から東へと埋没作用を続けていったと思われる。



図－1　平清盛の「袖の湊」の図

今一つの博多古図「伏敵編」〔1400年頃のものと推定される〕を見ると、袖の湊の内部機能の状態は兎も角として、湊の形としては存在している。

しかし、東部の寺町における最古の善導寺は1477（文明９）年に創建されその位置は袖の湊の内にあると思われることから、この湊は築造後約 300年をもってその機能を完全に喪失したものと考えられる。

また秀吉の町割りに当っては、この袖の湊の存在は全く考慮された形跡が無いので、この頃には既に埋没して仕舞っていたと思われる。石城志に1600（慶長５）年の黒田長政による埋立の記録があるのは、部分的な最終的な仕上げの事であろう。

4. 鎌倉・室町・戦国時代の博多の経過について

鎌倉時代において、この博多の地に起った大問題は蒙古襲来である。その第一次襲来〔文永の役（1274年）〕においては、上陸軍を迎えて我が軍は奮戦するも戦利あらず、遂に博多の地は焼土となり、我が軍は背後の水城【大宰府の防衛線・ 663（天智３）年構築〕の線に撤退するに至る。しかし、敵軍は深追いせず海路にて引上げるが、途中暴風のために壊滅したためにその第一次日本遠征は失敗に終る。

鎌倉幕府執権・北条時宗は第二次襲来の必至なるを思い、九州の御家人らに命じて、博多を中心とするこの地区の海岸線に所謂「元寇防塁」の築造を命じた。その大部分は石塁であるが、延長20㎞に及ぶ大土木工事であり、しかも工期約半年という突貫工事であった。この「元寇防塁」は土木的には極めて注目すべき構築物ではあるが、主題と直接関係するものではないのでこゝでは省略する。

第二次襲来〔弘安の役（1279年）〕においても、結局敵軍は暴風のため鷹島沖の海中に覆没し敗退に終るが、その原因として種々言われていることの一つに、この「元寇防塁」のために前回のように全面上陸を果し得なかった事が挙げられている。

その後の日元交流は主として商人や禅僧によって続けられたが、その基地はやはり博多津であった。

鎌倉幕府が滅び、1334（建武元）年建武の新政が発足したが、直ちに所謂南北朝時代に入り、わが国は政情不安定な時代となった。その頃大陸では1368（応安元）年に元が滅び明が興っている。

また朝鮮半島においては高麗もその末期的時代を迎えつゝあった。かゝる内外の政情不安定・社会不安を背景として、所謂倭寇の跳梁を見ることとなる。倭寇は朝鮮半島沿岸並びに山東半島辺りから大陸南部にかけて活動したが、わが国の中国・四国・九州の者が多く、その基地は主として北部九州地区であったと言われる。倭寇といわれるものは、その本質は貿易に従事していた商人の集団が主なものであって、貿易が円滑に進められない場合に一変して武装集団に変じたものと言われ、海賊的略奪のみの集団でもなかったようであるし、また、後には日本人ばかりでなく現地人の集団もあったようである。

三代将軍足利義満の時になり、南北朝の動乱期も終り幕府の政治上の安定期を迎えることとなる。義満は倭寇の跳梁を抑えて、公的な対明、対朝貿易を開始する、所謂、勘合貿易と称されるものである。勘合貿易は1401（応永８）年に始まり、当初は幕府船のみであったが、後に寺社船，大名船も加わるようになり、遂には大名船のみとなった。それも兵庫，堺を支配する細川氏と博多を領有した大内氏が独占するようになり、最終的には博多商人の活躍もあり博多を多くは起点とするに至ったのである。この背景としては、博多が倭寇や私貿易の根拠地として地の利を得ていた上に、対外関係に伝統的な強さがあったことが考えられる。

また、この頃の輸出品目の中には象牙，蘇木，胡椒等が含まれているが、それらは日本の産物ではなく南海方面の産物である。これは琉球を中継して入れたものを再輸出しているわけで、博多商人は朝鮮・琉球・南海方面の中介者としても活躍していたことを示していて、堺商人の好敵手であった。当時の博多商人の代表的人物として宗金（1455年没）がある。

周防（山口）の大内義弘は筑前・豊前の守護代であったが、1397（応永４）年に大宰大弐に任ぜられ、対明貿易の拠点博多を支配下においたが間もなく失脚する。その後、応仁の乱〔1467（応仁元）年〕をはさんで約130年間は、博多の争奪をめぐって、大内・大友・少弐らを中心とした争いは熾烈を極めることになる。

しかし、大内氏が次第に優位を確保してゆき、大内義隆は1536（天文５）年に大宰大弐となり、完全に博多をその支配下におさめた。このことは、博多が貿易上いかに重要な拠点であったかを物語ると共に、幾度かの戦火うける災難ともなったのである。

また、大内氏は周防の出身ではあるが足利幕府や京都と関係が深く、山口は西の京ともいわれ、高い文化を誇っており、博多がこの影響を強く受けたことは、文化的な面において、博多の一つの特徴を形成するものともなった。

しかし、時は正に群雄割拠の戦国時代であり、大内義隆は家臣・陶隆房に攻められ自殺（1551年）、毛利氏の台頭となる。大内氏が亡びその勢力が博多から撤退すると、豊前の雄・大友宗麟が博多を支配することとなるが、宗麟は1559（永禄２）年に九州探題となった。しかし、その後も博多争奪の戦は止まず、大友、毛利、龍造寺、島津等の戦はしばしば、再び博多を戦火の巷としたのである。

この間にあって、博多を荒廃から復興へと導いたのは、神屋宗湛，島井宗室，大賀宗伯，末次平蔵らの豪商達を中心とする所謂・博多衆であったと言われる。

5. 豊臣秀吉の博多再興（町割り）の実施

（1）当時の時代背景と秀吉の基本思想

1578（天正６）年、大友宗麟は日向の耳川で島津義久に大敗を喫した。当時毛利氏も山陰統一に忙しかったために、肥前の龍造寺隆信が博多の支配を目指すが、隆信もまた1584（天正12）年島原において島津家久と戦って戦死した。九州制覇を目前にした島津勢は、1586（天正14）年、筑前の岩屋城に宗麟の家臣・高橋紹運を攻め落し、つづいて立花宗茂（紹運の長子）の立花城を包囲攻撃したが、宗茂は年少ながら頑強に城を固守して秀吉の救援を待った。

1587（天正15）年３月、秀吉は九州征伐（島津征伐）のため20万の大軍を率いて九州に下った。島津義久は、直ちに立花城の囲みを解き本国に退き、５月には秀吉の軍門に降ったが、その折、博多の町は焼かれて完全な廃虚と化したのであった。

秀吉は直ちに筥崎宮において、九州の諸大名の領地を決定したが、その折、小早川隆景は筑前52万石を拝領し居城を名島城とした。また、秀吉の箱崎滞陣中に近臣や博多衆らと和歌の会や茶湯の会が盛んに催されたが、地元の商傑・神屋宗湛，島井宗室，柴田宗仁らが招かれている。

秀吉はこれら有力博多衆の懇望をうける形で、焼土と化した博多の復興に力を貸すことを約したと言われる。つまり、所謂・秀吉の博多再興（町割り）である。

しかしながら、秀吉の胸中には近い将来における朝鮮出兵の野望が渦巻いていたに違いなく、〔それは、５年後の1592（文禄元）年に実行されることとなる。〕その場合、博多の地理的条件、伝統的な性格、博多商人の資金力等々が、前進基地（肥前・名護屋城）の背後の経済基地として利用するに最適であることを見抜いていたと思われる。

このことは、後で述べたいと思うが、①復興計画が極めて迅速に行われたこと、②防衛都市的施策が行われたこと、③秀吉の直轄領として位置づけ他の武人の介入を許さなかったこと、④計画に当っては所謂・博多衆の意見を入れる形をとり、また楽市・楽座を布いて町人の自由都市的な性格を与えたこと、等々によっても推測されるところである。

（2）秀吉の町割りの土木的考察

a）町割りの開始

1587（天正15）年６月10日、秀吉は博多跡を検分するために神屋宗湛らを従えて南蛮船フスタに乗って博多の浜に上陸した。その翌日には早くも博多の指示書が描かれ、翌12日は町割奉行として、滝川三郎兵衛、長束正家，山崎志摩守，小西行長，世話役として黒田孝高（如水）が任命され、早速、町割りが開始されたと言われる。いかにも秀吉らしい電光石火の仕事振りであるが、実は黒田孝高が秀吉の内意をうけて、その家臣・久

野四兵衛に下調査のうえ立案させていた計画に、秀吉自身でいくらか手を加えたものであったとも言われる。

実施に当って奉行達は、博多豪商達の意見を十分聞きながら作業をすすめたと言われるが、これは秀吉の意向に基くものであろう。例えば、焼土の中から発見された旧井戸によって焼失前の旧町並みを想定し、基準道路（一の小路）の位置を決めたと言われることや、旧町名、例えば西門町、魚町、北舟町、綱場町等々多く残したことによっても推定される。このことは地元商人達の住みなれた故郷の町に対する郷愁をかきたて、新しい町造りに対する意欲を刺激し、秀吉に対する感謝の念を深めることになったことであろう。

この町割りには、６尺５寸４分（約２ｍ）の間杖（四角形の棒）が使われたが、その間杖は神屋家に代々伝えられ、後に宗湛屋敷に建てられた豊国神社の宝物となっていたが、1945（昭和20）年の空襲で焼失した。現在はその模造品が保存されている。

b）防衛都市としての施策

博多の北は博多湾に臨み、西は那珂川と冷泉津という入江がある。南は江戸幕末の古図によれば「古屋堀」と言う堀がある。益軒の「筑前国統風土記」によれば、「南の方の外部に横二十間餘の堀の跡ありて、瓦町の南西すみより、辻堂の東に至る。是南方の要害の固めなり。其土堤今もあり。此堀を房外堀と号す。臼杵安房守と言いし人掘らせたる故なりという。然れば元亀・天正の頃始めて掘りしなるべし。」とある。この安房守は大友一族で、元亀年間（1570～1573）に筑前守護代であったので、この頃掘ったものであろう。秀吉はこの堀を更に整備し、次に述べる比恵川の付替え工事によって堀水の疎流も図ったものと思われる。前記の「古屋堀」の名称の由来は不明であるが、幕末頃には東西端部が既に埋められている。この堀の跡地に後に国鉄旧博多駅が立地することとなる。

次に東部であるが、古図によれば比恵川は住吉神社と櫛田神社の間を流れて那珂川河口部の冷泉津に注いでいた。大友家が博多支配の頃、農業政策のため灌漑用水路を比恵川より「袖の湊」の所謂・船溜りにかけて開削したと言われるが、秀吉はこれを大々的に改築し、石堂川（御笠川）として河川付替え工事を行って博多の東に石堂川を配したと言われる。また、これによって、先の房外堀は、石堂川と那珂川を結ぶ形となり、堀水の疎流も図られたと思われるのである。

以上によって周囲を海，河川，堀に囲まれた博多の地への出入路は極めて制限されていた。つまり、東は石堂橋，西門橋、西は中島橋，南は堀中央の矢倉門の四箇所であったが、これも外敵侵入対策の一つであったと思われる。

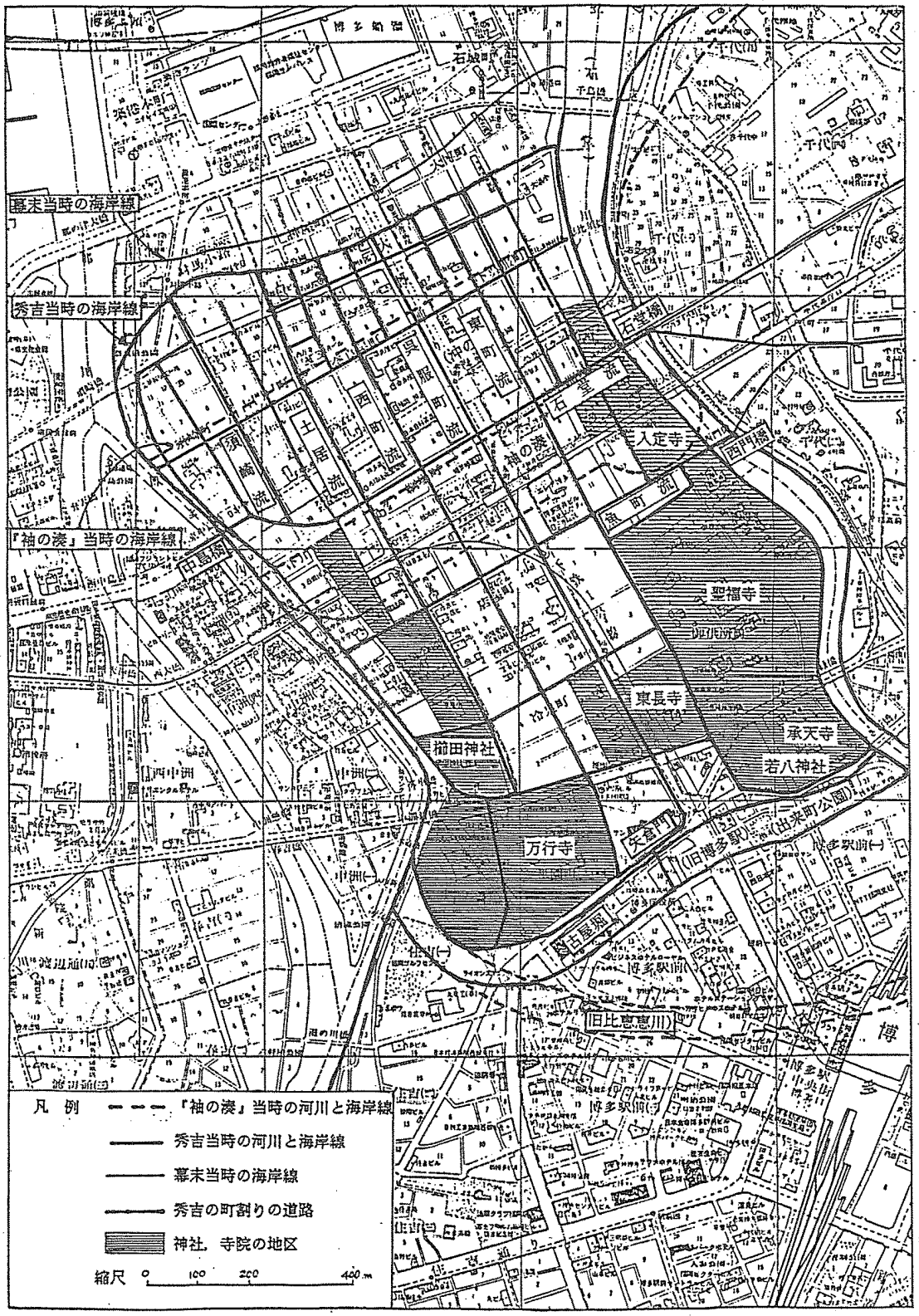
次に寺社の配置であるが、博多の外周特に東部と南部に集中配置していることが注目される。寺院や神社は衆知のように、一般的に広い敷地と共に広間を有する建物があるので、火急の場合の軍隊の編成・駐屯、あるいは兵器や諸物資の保管に適しているものである。東部には既に聖福寺，妙楽寺，承天等などの大寺院が立地していたが、更に十余の寺院を配した。また南部には矢倉門を中心に既存の櫛田神社，東長寺，万行寺などを含めて十余の寺社を配した。

これらの状況からみて、武士の存在を許さない自由商業都市「博多」を目指しながらも、尚秀吉は戦国の武将らしく、火急の場合を想定した「防衛都市」の構想を固持したと思われる。このことはまた、後に黒田藩による城下町の一部として、この博多がそのまゝ組込まれる要因ともなったのである。

c）町割りの実施～道路の配置

町割りに当っては、南方（陸側）を上手，北方（海側）を下手として東西道路と南北道路によって、町を縦横に割った。南北道路が幹線道路と言われるもので巾員は一般的に３間（約5.5m），東西道路は補助幹線で巾員は2.5間（約4.5m）であり、この道路によって区画された区域は、一般的に東西 400尺（約 120m），南北 800尺（約240m）の短冊形である。

鏡山猛氏（元九大文学部教授，故人）の説によれば、『これは平城・平安京の古制と軌を一にするものである。博多の町の歴史はきわめて古いので、秀吉以前にも整備された道路網があったに相違ないが、それを具体的に示すような資料はない。しかし、諸般の事情から四〇〇尺基準の街があったとは考え難い。博多から京都



図－2　豊臣秀吉の「博多再興（町割り）」の図

に還り、天正19年に京のお土居築造を開始するとともに、京都の復興のための町割計画を実施した秀吉が、博多の地において新しい町割りを行うにあたって、王朝時代の都市、おそらく平安の都京の姿を描いて復古的な計画を樹てたのではあるまいか。』ということである。

この短冊形が基本型であるが、地形上一部には異なるところ、あるいは更に小割りされた区域もある。また道路巾も小割りのところでは２間～1.5間（3.6～2.5m）である。

これらの区域は主として北西の地区であるが、この地区においては、①中島橋の位置の関係で、石堂橋からの東西道路を曲げたこと、②地形が博多川の湾曲の関係でふくらんでいること、③船溜りとそれに関係する施設や漁民のための生活スペースが必要であったこと等に起因するものであろうと思われる。

d）町の区画割り

秀吉は新しい道路配置に基いて町の区画割りを行ったが、それは現代の街区方式（道路割方式）ではなく道路方式（背割方式）であった。そして、町名については、先に述べたようにできるだけ旧町名を採用したものと思われる。そしてまた、後で述べる商業対策、町民の自治組織に関連するが、町内を道路を中心とする所謂・「流（ながれ）」に分けている。つまり、向う三軒両隣は同じ流に属すということになる。中心道路を呉服町（一の小路）に置き、呉服町流とした。その東を東町流、その西を西町流とし、更に西に土居流、洲崎流を配した、いづれも南北の縦幹線道路を中心としている。そして、石堂橋からの東西線を石堂流（一部縦幹線を含む），西門橋からの東西線を魚町流として、全部で七つの流に配分した。流は実際は面であるので縦横流の交叉部では問題が生ずるが、「入軒」という措置がとられ、南北幹線道路部を優先することとしたために、東西筋は切れている。

この流は博多独特のものであって、一種の町民の自治体組織でもあり、祇園山笠や松囃子（まつばやし）などの行事も共同協力して行うことになっている町筋であった。

この流は江戸時代になって厨子流，新町流，浜流の三つが追加されて十流となるが、これはその後、南部地区の寺社の多い地区に門前町的に町並みが形成されたり、北の海岸部において寄洲の発達に伴う町の拡張がみられたことによるものであろう。

小割り道路がある区域等は別として、基本型の区域においては幹線道路に面する家々の奥行きは約３０間（約55m）である。記録による神屋宗湛，島井宗室らの表口13.5間は特例であって、一般的には間口３～５間（5.5～９m）程度と推測されるので、面積的には約90～150坪であったであろうが、所謂・うなぎの寝床と言われるような敷地形態であったと思われる。したがって、一般家屋の形としては、入口を入ると片側に土間又は通路が奥に伸び、それに沿って店，座敷，居間などが並び、さらに中庭をへだてた奥に奥座敷，居間，納屋などが建てられる様式が多かったと言われる。

後に小割り道路を新たに入れて、この奥行きを半分にする地区が生ずるが、町の人口増に伴う敷地面積の不足が生じたのか、小職人等が特に増加した為か定かではないが、一般町人にとって、このうなぎの寝床的敷地形態が使い勝手が悪かったことに起因するのかも知れない。

（３）秀吉の商工業政策

秀吉はこの「博多再興」に当り思い切った商工業振興政策を実施した。これは織田信長の思想を継いだものと言われているが、博多が所謂・中世的な都市でなく新しい時代の都市として発展するように配慮したものである。

秀吉は博多再興に当り九ヶ条からなる「定」を布いて、「博多楽津」の思典を与えた。これは当時の都市政策を示すものゝ一つで注目に値するものであるが、要約すれば次のようなものである。①物品の専売・専造をする諸問屋、諸座を禁止して、すべての商人・工人の営業を自由にする。つまり楽市・楽座の宣言である。②地祖と一切の夫役を免除する。これによって博多は無祖無税の地となった。③博多の船が全国の海で海難に会った時の保護を命じた。④喧嘩・口論などは全て両成敗とした。これによって平和な商工の取引を期した。⑤いゝ加減な訴訟や指令を禁止した。つまり新しい自由な政策の施行を図った。⑥出火，付火の連坐制を廃して、

個人の責任を重んじた。⑦博多を徳政除外区域に指定した。つまり安心して商工の取引ができるようにした。⑧博多津内に武士が家を持つことを禁止して、その横暴から商人・工人を保護した。⑨押売，狼藉を禁止して、商人・工人を強力者から守った。

この「定」（朱印状）は現在櫛田神社に残っている。

秀吉のこのような商工業政策、即ち楽市・楽座，地祖・夫役の免除，武士の居住や徳政の否定等々の手厚い保護政策と共に、「流」に代表されるような町民の自治組織の活動によって、博多の商工業は大いに振興していったのである。こうした状況を背景として、所謂・博多三傑といわれた神屋宗湛，島井宗室，大賀宗九・宗伯父子などが貿易，金融，商業上に大活躍することとなるのである。

このことは、秀吉の保護という条件下の発展であり、堺が町民自身の自治・自由の確保に基いた自由商工都市を建設したことと若干趣を異にしていると思われる。また堺は後に秀吉が大阪の町建設にあたり、堺町民の強制的移住策を取ったために衰退の途を辿るが、博多は後に黒田藩が福岡城下町建設に当り、博多はそのまゝにして、城下の町人町は昔から黒田氏と縁故のあった町民の移住によって作ったにも拘らず、その圧迫政策や徳川幕府の鎖国政策によって衰退を辿ることとなることも亦異質の現象である。

6. おわりに

福岡市の博多の地区について平清盛と豊臣秀吉の事跡について述べてきたが、その背景に欲望や野望の存在を否定はできないにしても、結果的にはこの地区の歴史的一大エポックをなすものであった。彼等に共通するものは戦乱の巷を馳けめぐった名だたる武将であると同時に政治的にも最高の権力者となった人物である。そして土木的事跡においても、その企画の卓抜なること、主として技術集団の組織力とその指揮、人事管理等の極めて巧みであったことを示している。

特に秀吉は、焼亡した町跡つまり空白の大地に王朝時代の都京の姿を夢見ながらも、なほ旧町時代のおもかげを残すことに心がけ、自由な商工都市を目ざしながらも、なお都市の防衛に配慮することを忘れなかった。また、町の構成に当っては仏教思想に基づく「七づくし」の設定があったと言われ、七流，七堂，七番，七小路，七口，七厨子，七観音を配して七・七・四十九の願いをこめたと言われている。これは清盛が大輪田の泊の築造に当って、一石ごとに経文を書きつけて投入したために「経ヶ島」の名が生じたと言われることにも相通じて、大変興味深い。

最後に、これらの事跡をつなぎ度重なる戦火の試練を乗り超えて逞しく博多を支えてきた庶民の活力を示すものとして、現在櫛田神社の境内に残る「博多べい」の碑文を御紹介してこの項を終ることとする。

「博多べい」

天正15年（西暦1587年）豊臣秀吉の博多町割り（戦災復興都市計画）によって、たくましくよみがえった市街には、「博多べい」と呼ぶ土べいが長く連なった。郷土再興の悲願をそのまゝに、焼け石，焼け瓦が厚く塗り込められ、当時、重なる戦禍の焦土から奮起した根性と心意気を示して余りがある。このたび、博多三商傑の一人・島井宗室の屋敷跡に三百八十余年の風雪に耐えた最後の「博多べい」が、四散の危機に直面するに当って、広く志を集めこゝに移築再建した。

昭和四十五年三月　　阿部　源蔵（福岡市長）